

□ 立地の不便さ

着任して第一に驚いたのは、キャンパスの立地の不便さである。いまでも「最寄りの駅はどこですか」と人から聞かれると、思わず苦笑してしまうのだが、一番の最寄りの駅（京王線「めじろ台」駅、横浜線「相原」駅）からでもバスで十二三分はかかる。おまけにその最寄りの駅を通りかかる電車の本数がこれまた決して多くはない。よって必然的に一本の電車に集中する事になり、新学期とテスト前など、電車をおりてからバス停までの「競走」はなかなかすさまじいものとなる。積み残しがしばしばあるからである。加えて不便さは、キャンパス回りに一軒の店屋もない事である。大学にきたら、大学内にいるしかないのである。「せめて大学入口のバス発着ロータリーあたりに飲み屋の一軒でもあつたらなあ。」と

いうのは、学生・教職員の共通した願いなのだが、このキャンパスに移転して十年、いまだかなえられていない。大学・大学院時代を、京都と東京の便利な街中で暮らした身には、コンパのために大学から小一時間かけて八王子か町田にでる生活には、正直いつてつらいものがある。

□ 十年目のキャンパス

しかし、そんな不平不満をカバーしてくれているのは、教職員のアットホームな仲の良い雰囲気と、学生達の質の良さである。

法政大学は現在三キャンパス体制となっている。多摩キャンパスは、社会学部と経済学部の一部の全学生（二部は市ヶ谷キャンパス）、及び工学部の一年生を対象にして、十年前に移転してつくられたものである。ちなみに工学部の二年生以上は小金井キャンパス、法学部、文学部、

経営学部の全学生は市ヶ谷キャンパスに通学している。

私が本学社会学部に採用が決まり、始めてご挨拶に伺ったその日から感じた印象は、この先生達は、自分達のキャンパスや学部に誇りをもっている、ということだった。そういう感じは、今まで自分が接してきた大学教員達から意識して受けた事のないものだった。そしてこの印象が誤っていない事は、その後の生活の中で繰り返し確かめられてきた。

建物の構造・配置から、カリキュラムの仕組みに至るまで、キャンパスの一つ一つのアイテムが、自分達の手で練り上げ、意味を込めてつくられ、現在に至っているものであること、そんな話が事あるごとに、意図的な説明としてでなく、さりげない会話の中でどの教員からも共通して語り伝えられる。

少しして気がついたのは、これは大学創設第一世代の感覚なのだ、ということである。法政大学自体は長い歴史をもつ

ているが、社会・経済学部・教員にとつて十年前のこのキャンパスへの移転は、ある意味で新しい大学のスタートといえるぐらいの画期だったのではないか、ということである。

□ 移転以来の取り組み

教授会では、学部の移転を決定した後、まだ山林のままであった当時のこのキャンパスに全員で足を運び、その不便さにびっくりしながら、でも、学部棟はこの辺にその横にはこんな建物を、などと賑やかに夢を語り合ったという。「道もまだろくになかったから、みんな長靴を履いてきたり、『まむしに気をつけてね』って家族にからかわれたり」と移転前後の話は、苦勞に満ち、滑稽さもあり、それでいて夢やロマンにあふれた、まさに「開拓者」を思わせるものがある。

私の属する社会学部に関しては、建物で言えば、少人数教育の充実のために、ほぼゼミ一室のゼミ室教（現在では二



ゼミ一室程度)を用意し、カリキュラムでは、一年次からの少人数教育の場(基礎ゼミ)を設けると同時に語学教育を三年次まで引き延ばし、時間割で言えば、「ゾーン制」と呼ばれる学生の履修の便を計るための仕組みをつくり、教員組織

については、教養・語学担当教員も含めた学部の大多数の教員が二、四年生対象の専門ゼミを担当し得る体制をつくった。このキャンパスは、こうした移転前後の教職員の驚くべき集約的エネルギーで、一つ一つまさに手作りで作り上げられてきたのである。前任校の国立大学では感じる事のなかった、教職員の打ち解けた雰囲気や連帯感の強さは、一つの場をゼロからともに作り上げてきた者同士がもつ共同性なのかもしれない。

この共同性は、近年我々のような移転時の苦勞を知らない新参者教員が増えるに及んで、一つの曲がり角に立ちつつある。ここでは教員間の対等平等性は驚くほどに高く、我々若手の勝手な発言はおおらかに許容されている。そんな雰囲気を支えられて、教員間の「ジェネレーションIIギャップ」が少しずつ出始めているのである。

□ 学生達の「よみ」

交通の不便な地に移転すると大学の評判が落ちる、とよく言われる。だが、法政の多摩キャンパスの場合にはむしろ学生はよくなった、ともいわれている。単純な事はいえないが、自分の実感としても「良い学生達に恵まれているなあ」としばしば思う。

その「よさ」とは、ごくまっとうな社会性をもっていることである。しらけてたり、投げやりだったりする空気は、概して薄い。もちろん大教室での授業の私語は時として問題になるし、本を読む文化のない学生が多くなってきたり、ご他聞にもれない。しかし、PKOやコメ市場問題といった大きな社会問題についても問いかければ反応は悪くないし、一方で日本の豊かさの裏側にある底辺層、障害者、外国人労働者、等の社会的矛盾への関心も意外なほどに高い。何より驚かされたのは、そうした社会問題に対して、本を通じて取り組む文化は確かに希薄だが、実践的に自分の手足を使っ

て取り組むことにはすこぶる意欲的な事である。

長い休みを活用して日本や世界を歩いてくる学生、バイトの合間を縫ってボランティアに関わる学生、それ自体は今日珍しい事ではなからうが、このキャンパスでは、こうしたアクティビティのある学生たちが全体の空気をリードしている感じがする。

「それは法政ぐらいの偏差値があればこそよ。」と、他大学の人からはしばしば言われる。が、私にはそれだけのこととは思えない。

ゼミ対抗でのディベート大会を行うゼミ、毎年大規模な本格的な社会調査を実施するゼミ、二十年以上一カ所への現地調査を続けるゼミ、ビデオ番組製作をしてコンクールに出展するゼミ、等等先輩の教員達のゼミ活動には目を見張られる活気あるものが多い。

この大学が時間をかけてつくり伝えてきたリベラルさや現代社会批判の伝統が、

今日なお様々な形で学生達を社会化し、今の世代らしい感性を伴いながら新たな主体を形成しつつあるのではないかと考える。

□ 豊かな進路選択に向けて

今後の課題として感じているのは、学生達の卒業後のフォロワーである。学生時代の様々な活動や実践を、ただのいい思い出にせず、そこでつかんだ感覚を卒業後の生き方につなげていって欲しい、と我々は願う。が、幸か不幸か、そうした進路はなかなかなく、逆に大企業サラリーマンの進路はほとんどに用意されている。学生の多くは、少々割り切れない思いを抱えたまま進路を決めることが多い。大企業サラリーマン以外の進路をもっと豊かに示していく事、大学で学んだ事をつなげるような大企業サラリーマンとしての生き方を示唆していく事、そんな事が今、求められているように思われる。

(ひらつか・まき)